S3-9

東北療護センターにおける遷延性意識障害患者に対する音楽運動療法の経験

Experience of musico-kinetic therapy for patients with prolonged consciousness disturbance in Tohoku

長嶺　義秀[1)]、中里　信和[1)]、及川　明海[2)]、老松　廣子[2)]、佐藤　知子[2)]、阿部　浩明[3)]、藤原　悟[4)]

広南病院東北療護センター[1)]、広南病院看護部[2)]、広南病院理学療法室[3)]、広南病院脳神経外科[4)]

Yoshihide Nagamine[1)], Nobukazu Nakasato[1)], Akemi Oikawa[2)], Hiroko Oimatsu[2)], Tomoko Sato[2)], Hiroaki Abe[3)], Satoru Fujiwara[4)]

[1]Department of Neurosurgery,Tohoku Ryogo Center, Kohnan Hospital, [2]Department of Nursing, Kohnan Hospital, [3]Department of Rehabilitation, [4]Department of Neurosurgery, Kohnan Hospital

【目的】我々は東北療護センター入院中の遷延性意識障害患者に対して音楽運動療法を取り入れて治療として取り組んできたが、今回これまでの経験をまとめたので報告する。

【対象および方法】対象は2002年12月から2005年12月までに音楽運動療法を施行した8例である。音楽運動療法はピアノによる生演奏に合わせて、トランポリン上下運動を10分、その後30分間リラクゼーションを行いながらマッサージや経口摂取訓練を加えた。療法中はビデオカメラで表情および全体の様子を記録した。療法は週１回のペースで行ったが、ある時点からは月1回の維持療法とした。各症例とも経時的に広南スコアで評価を行い、治療開始時年齢、開始時期、治療期間、治療前・中・後の広南スコアによる治療効果を検討した。

【結果】対象8例の治療開始時年齢は18歳から56歳まで(平均29.3歳)、開始時期は受傷後8月から36月まで(平均19.1月)、治療期間は16ヶ月から29ヶ月まで(平均23.7ヶ月)、治療前の広南スコア(満点70点が最重症)は59～68点(平均64.5点)、1年後の広南スコアは28～68点(平均57.3点)、ほぼ2年経過した最終スコアは29～68点(平均57.5点)であった。著明な改善がみられた症例は3例みられたが、全く改善がみられなかった症例も3例あった。また、治療開始後1年以降に改善効果がみられた症例はほとんどなかった。

【結論】音楽運動療法は全例に効果があるとは言えないが、著効例も存在する。効果の有無を早期に判断し、適応を厳選していくことも重要と考える。